

子どもたちの回復力を信じよう！！



大変な体験をした後で、そこから立ち上がる精神的な回復力、困難を乗り越える力のことを、レジリエンス(resilience)といいます。

子どもたちは、この辛い体験を乗り越え、これからの日本を支える大人に成長していくことと信じます。古来、困難を乗り越えた人々が、世の中を切り開き、歴史を創ってきたように。

レジリエンスを高めるために、私たちができるのは**勇気づけ(encouragement)**です。存在そのものを認め、結果よりも努力や過程に目を向けていくこと、まず我々が子どもの能力を信じることなどが、勇気づけです。

「おはよう。元気な顔にあえてうれしいよ。」「さよなら、また明日ね。」と、笑顔で接すること、しずんでいるときにそばにいること、どれも勇気づけです。

また、「あなたを支えているものは何？」と、聴いてみましょう。子どもの努力や前向きな気持ちと、それを創り出している子どもの能力への信頼を伝えてみましょう。

辛い経験をした子どもたちが複数いるとき、集いあう機会をつくり、経験や思いを語り合って共有することも勇気づけにつながります。

しかしながら、依然、以下のような症状に長く悩む場合は、スクールカウンセラーや医師の援助が必要です。保護者とよく話し合い、必要な対応をお願いします。

孤立感 現実感の消失 フラッシュバック 強い不安症状
睡眠障害 集中力の過度な低下 過度の警戒心 など

5 学校・担任への支援窓口

- ①日本学校心理士会山形県支部
支部長 松崎 学
事務局 出口 毅
- ②日本教育相談学会山形県支部
理事長 八柳和夫
事務局 佐藤節子
- ③山形県教育カウンセラー協会
代表 松崎 学(同上) 事務局 佐藤節子(同上)
- ④山形県教育委員会義務教育課
義務教育課

緊急メッセージⅢ 今 教員にできること

日本学校心理士会山形県支部・日本学校教育相談学会山形県支部・山形県教育カウンセラー協会

避難児童生徒等への学校による支援

大震災から3か月近く経過しました。避難児童生徒の山形県内幼小中高校特別支援学校への入学転校生は616人と発表されています(5月1日県教育委員会発表)。住み慣れた家・地域を離れ、慣れない土地で過ごす方々のご苦労を思うと心が痛みます。避難生活が長くなるにつれて、現在の生活が日常化し、子どもたちも新たな人間関係を作って適応しながら成長しています。辛い体験をのりこえ、前にもまして前向きになり、人間として成長する人々の姿をみます。それぞれの学校で、すべての子どもたちの成長を支える人間関係が形成されますよう心から期待しております。

2011年6月7日

かかわり方の基本

1 子どもたちの人間関係を育てましょう。

子どもたち同士のかかわりを促進し、クラスにいますとホッとするような人間関係ができるように心がけましょう。災害にあったことや転校してきたことを理由にいじめやからかいがあるときには、はじめにお互いの不安を聞き取った上で、本音で子どもたちと話し合いをする必要があります。

2 チーム支援をしましょう。

多くの目で子どもたちを見ましょう。子どもは大人によって態度が異なるときもあります。どれもその子の一面です。関わっている大人で情報を交換し、時にはアンケート等で、子どもたちの不安感を数値化し、よりの確に理解することも必要です。

特に、「いじめ」に関することは、早期発見が大切です。

3 子どもの回復力を高めることばかけをしましょう。

人生は七転び八起き。転んだことが重要なものではありません。そこから起き上がったことに意味があるのです。つらい気持ちに共感することもさることながら、感情の切り替えなど、子どもがもつ建設的な側面(できていること)に注目すること、それをことばにしてその子どもに伝えることで、自分のもつ力に意識づけられます。子どもがそれを意識して活性化できることは、さらなる回復力を生み出します。



よい人間関係をつくるのは、解決の仕方

被災し転校してきた子どもがいじめにあったというニュースは記憶に新しいところです。子どもたちは素直でやさしい面があれば、残念ながら、人を傷つけることで自分の存在感を確かめる面を（大人も）持ち合わせています。

いじめ行動を示している子ども自身が、その集団における所属感や存在感をきちんと味わえなくなっていることで起こると考えることができます。子どもの所属する重要な集団は、家族と学級ないしは学校です。家でも学校でも所属感や存在感を味わうことができているならば、いじめる必要など、ないのです。しかし、さまざまな家庭状況の中で、家ではそれが難しい子どもも出てきます。かといって、先生が家族関係に口出すことはできません。だからこそ、学級ないしは学校では、どの子も所属感や存在感をきちんと味わうことのできる学級集団にしたいものです。

いじめは、いじめる側がいじめという行動を採らなくても済む状況になることが、解決です。教師がそれを裁いてどちらかを叱ったとき、今度はその子に他の子からのからかいや差別が起こることがあります。大切なのは解決の仕方です。いじめ行動を採った子ども自身が、つらい気持ちや苦しい思いをもっていることもわかってくれる先生や友達がいることを実感できる人間関係を創ることが大切です。その中では、いじめという行動を選択する自分でありたくない思いを育てることができるかもしれません。

思いやりの心を育む活動

① ビーイング

大判用紙に大きなハートを書く。こんな学級にしたい、言われるとうれしい言葉を、ハートの中にみんなで書く。ハートの外には、言われるといやな言葉を書く。教室に掲示し、学級で問題が起こった時には、その紙を見ながら何が起こったかを話し合う。

② クラス会議

朝の会、椅子を持ちよって全員で一つの輪になる。

昨日（昨週）のことで、嬉しかったことを順番に話す（誰が話す人であるか明確になるようにトーキングスティック等を用意するとよい）。

みんなに考えてもらいたいことを一つ選び、話し合う（ロールプレイ等をいれて）。

③ ソーシャルスキルレーニング

私たちは誰もが人として大切にされる権利をもっています。お互いに大事にする関係を創るためには、コミュニケーションスキルが必要です。あいさつや自己紹介、会話を続けたり終わりにしたりする話し方、自分も他人も大事にする話し方・頼み方・断り方など、練習することもこれからの学校教育では必要になってくるでしょう。

いずれにしても私たち大人が、仲間意識と人権意識をもち、子どもたちのよいモデルとなることにこしたことはありません。

子どもたちを複数の目で見、情報と支援の共有を！

これからの教育に求められることとして、河村茂雄氏（早稲田大学教授）は次の三つを述べています。

① エビデンス・ベースト：科学的実証性を求める教育

科学的なデータをもとに実践の効果を検証する姿勢とそこからより良い実践を創出していく基本的スタンス

② ヒューマン・サービス：受け手の主体性を尊重する支援

子ども自身がどう生きたいのか、その主体性を尊重した支援のあり方

③ チーム援助（スクールカウンセラー・保護者・教師によるチーム援助）

一人の教師のはたらきには限りがあります。個別の対応が必要な子どもに対して、その子にかかわる保護者と複数教師が情報を共有し、かつ、具体的な支援策も分担・共有するという考え方です。

そのために

アンケート等の客観的な情報を得て、チームで共有しよう。

経験と勘による子ども理解はもちろん大切です。しかし、教師に見えない面や理解が難しい苦手な面があることを自覚し、定期的なアンケートや面談で子どもについての確かな情報を得ていきましょう。

課題と対応策をチームで共有しよう。

個別の配慮が必要な子どもについては、情報を持ち寄り、目標と対応策を分担・共有していきましょう。「様子を見ましょう」となる教育相談の会議ではなく、「誰が、何を、いつからいつまでする」かを明確にしておくことです。

原因探しに長時間を費やすのではなく、「これからどのようなことができるか」という解決・未来志向の教育相談を展開しましょう。

